

3443

中5R64

中等國語讀本

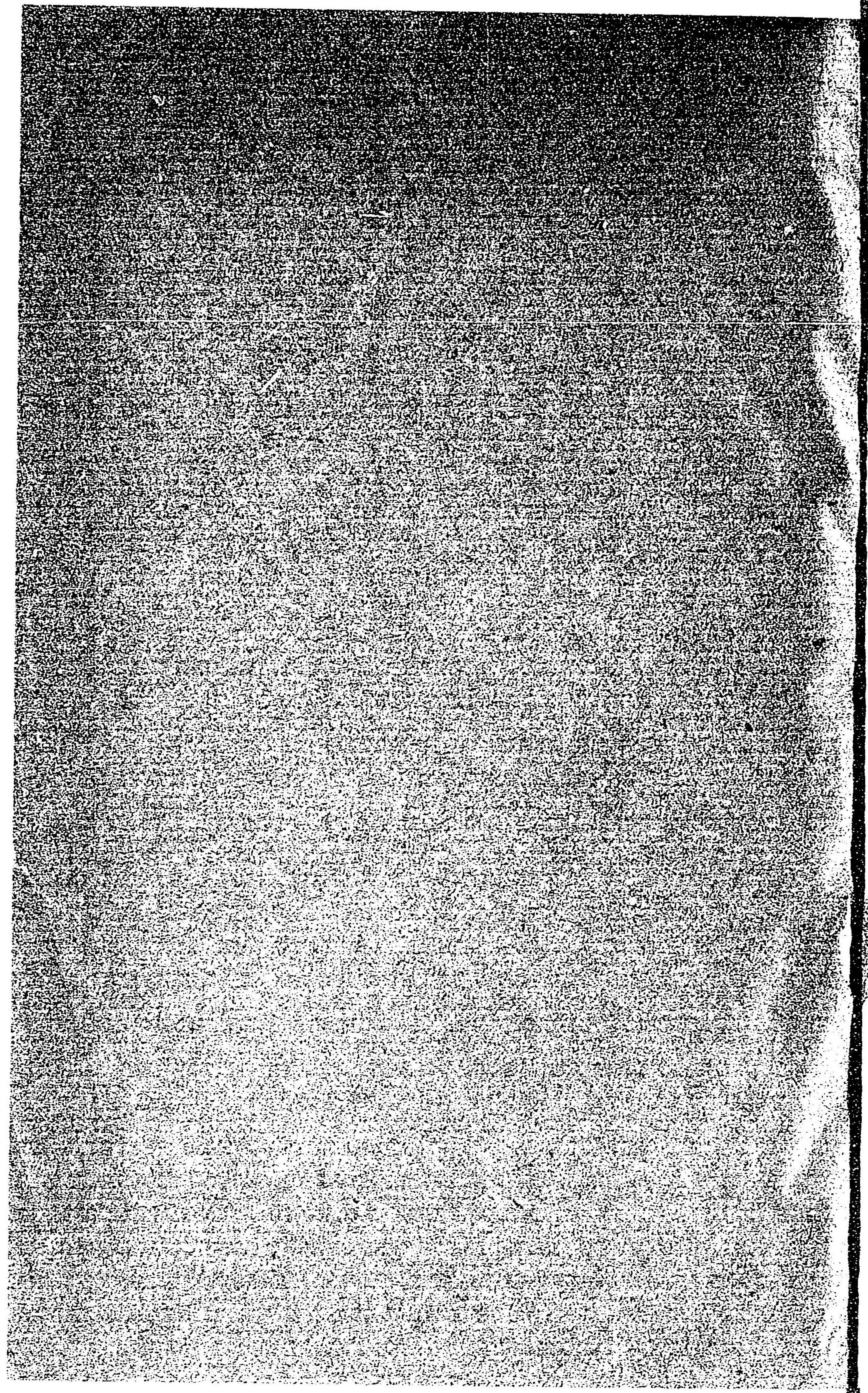
一卷

參考書

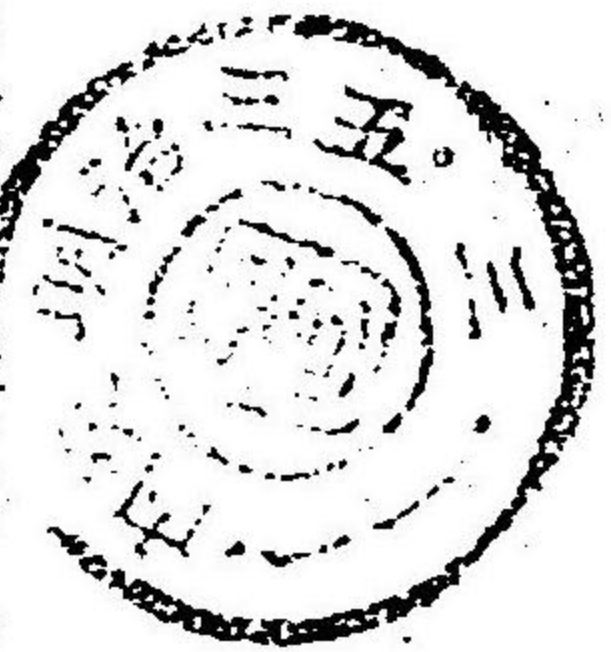
全

非賣品

明治書院編輯部編
明治書院發行



中等國語讀本卷一 參考書



○作者三島通作氏。鹿兒島藩士なり。明治のはじめ、東京府廳に出仕し、後、酒田、山形、福島、栃木等の縣令に歴任し、内務省に入りて、土木局長となる。尋いて警視總監となれり。廿一年七月、病を以て逝る。○國のすがたは、二十葉ばかりの一小冊子なり。わが國體の萬邦に秀でたる所以を説出るものなり。

○弓弭の貢手末の貢。弓弭の弭は、弓の端の處をいふなれど、こゝにては言の文に置けるのみにて、特に意あるにあらず。手末は手さきといはむが如し。調とは、御供給の義なり。ツキハ續くるをいふにて、朝廷にて用ゐ給ふ諸の物を、下より供給奉ることをいふなり。さて、弓弭の調といふは、弓もて獲たる獸類の肉、又その皮などの類を獻ることにて、男子の調なり。手末の調は、是に對して女子よりの調をいふにて、絹布などの類を獻るをいふなり。記紀崇神天皇の處に見えたり。○高臺に登り給ひても云々。仁徳天皇御即位の四年二月、朕、高臺に登りて、遠く望むに、烟氣起らず、これ百姓窮乏して、五穀みのらざる證なりと、群臣に詔し給ひ、その年の三月には、詔して、その以後三年間の課役を除き給ひぬ。かくて風雨も時に順ひ、五穀も豊穰に、三年の後は、民、皆、富めりといふ。この事、日本紀に詳し。○寒夜に會ひ給ひても云々。醍醐天皇、寒夜に御衣を脱がせ給

ひて、賤民の飢寒を思しつけ給ひしをいへるにて、大鏡道長公の條に、世繼のことばに、この御帝の
ことをあがめまつりて、「大小寒のころほひいみじう雪ふりさえたる夜は、諸國の民百姓、いかに
さむからむとて、御衣をすて、よるの御おとよりなげいだしおはしければ云々」とあり。この事
なほ續古事談にも、見えたり。○六百年來の幕政 源頼朝、文治元年、總追捕使となりて、府を鎌倉
に開きしより、慶應三年、徳川氏の大政を奉還せしに至るまで、その間、後醍醐天皇の建武中興の數
年を除きて、政權幕府の手にありしこと、實に、六百八十餘年なり。○版籍奉還 維新の時、徳川慶
喜、先づその封土を奉還せしかど、各藩は、なほ土地人民を私有し、爲に政令一途に出でざるの觀あ
りき。こゝに、薩長の二藩卒先して封土人民を奉還せむことを請ひ、列藩、次いで、これにならひ、皆そ
の封土人民を奉還せむことを請へり。朝廷、乃ち、これを聽し給へり。これ明治二年六月の事なり。

二、憲法發布

○憲法 國家統治の主體、客體、及び、その機關の組織性質を定むる大法にして(卷九、一、「國體、政
體および憲法」の條参照。)大日本帝國憲法は、天皇、臣民權利義務、帝國議會、國務大臣、及、樞密
顧問、司法、會計、及び、補則の七章七十六條より成る。○皇祖 神武天皇をいふ。天皇は、紀元
元年辛酉正月朔大和國橿原宮に即位し給へり。○大祝日 紀元節なり。明治五年十一月十五日、神
武天皇即位の歳を以て紀元となし、毎歲、祭典を修することを布告し、翌年、始めて、その典を擧ぐ。
爾來、毎年絶ゆることなし。○千代田の宮 現今皇宮のある地を千代田と稱す。故に皇宮を千代田

の宮といふなり。○賢所 畏き所なり。宮中にありて、崇神天皇の時に模造せられたる八咫鏡を安
置せる處なり。古は、これを内侍所、又は、温明殿といへり。因みにいふ、普通に、賢所の左右にあ
る皇靈殿と八神殿とをも併せて、賢所と思へるは、誤なり。○神器 八咫鏡、草薙劍、及び、八咫
瓊勾玉、即ち、三種の神器なり。その中、八咫瓊曲玉のみは、別に新器を造らせられざりしかど、鏡
と、劍とは、崇神天皇の御時、別に模造せられて、曲玉と共に、爾來、長く、皇宮に奉安せられた
り。さて、神鏡は、天徳、寛弘、長久の三たび、炎上にかゝらせ給ひしかど、少しも異變なく、内
侍所にまします。今の賢所は、即ちこれなり。又神劍は、壽永の亂に海底に沈み給ひしかば、伊
勢神宮より献りし寶劍をもて、これに代へて、今に傳はりませり。神璽ハ尺瓊は、終始、異變なく
て、そのまゝにおはします。かくて、神代より傳來せる鏡は、伊勢神宮に、劍は熱田神宮に、奉祀せり。
君が世 古今集卷七に、題知らずといふはしがきにて、讀人知らず、「我が君は千代に八千代にさされ
石の巖となりて苔のむすまで」とある歌なり。今は、第一句を「君が代は」と改めて唱ふ。○三條内
大臣 三條實美公をいふ。内大臣は、御璽國璽を尙藏し、常侍輔弼の任に當る官なり。公は、實萬
公の二男にて、天保八年二月八日、京都に生る。維新以來、大業を補翼し、柱石の任に當り、國の
元勳たり。官、從五位侍從より進みて、内大臣正一位大勳位に至る。明治廿四年二月十九日薨す。○伊
藤樞密院議長 伊藤博文侯なり。舊長州藩士にして天保十二年生る。明治政府に事へて、特に憲法
制定に功あり。久しく總理大臣たりしが、今帝室制度取調局總裁正二位大勳位侯爵たり。樞密院は
天皇親臨して重要な國務を諮詢する所にして、議長は、その院に屬する一切の事務を總管する官な

り。○黒田内閣總理大臣 黒田清隆伯なり。奮鹿兒島藩士にして、明治政府に仕へて功勞あり。樞密院議長、陸軍中將正二位勳一等伯爵たりしが、明治三十三年薨す。内閣は、國務各大臣を以て組織す。而して總理大臣は、各大臣の首班として機務を奏宣し、旨を承けて行政各部の統一を保持する官なり。○百一發の祝砲 紀元節天長節、及び、臨時の祝日には、百零一發の祝砲を放つこと、禮砲式の定むる所なり。○伊勢神宮 伊勢國度會郡にあり、内宮には、天照皇大神を祀り、外宮には、豐受大神を祀る。○畝傍山および月輪の山陵 畝傍山の山陵とは、大和國高市郡にある畝傍山ウチヤマノシラミヤ、月輪の山陵とは、山城國愛宕郡泉涌寺にある後月輪チンツケンワヒガシヤマノミサキ、東山陵にして、孝明天皇の御陵なり。○岩倉具視 京都の人。堀河前中納言康親の子。岩倉具慶に養はる。幼名は周丸。人となり俊邁沈毅、夙に皇室の式微を嘆き、同志の士と謀りて經營畫策し、維新の大業を翼賛して功績最多し。維新の後、外務卿右大臣に任ぜらる。明治十六年七月二十日薨す。年五十九。その墓は東京品川海晏寺にあり。なほ本書卷上「岩倉公逸事」の章を参照すべし。○島津久光 薩摩守齊彬の弟藩政を補翼し、また公武の間に斡旋して功勞多し。維新の後、機務に參與して、屢褒賜を受け、從二位左大臣に進む。明治七年五月廟堂の諸公と、議協はず、病と稱して、鹿兒島に退隱す。廿年九月從一位に叙せられ、その十二月六日薨す。年七十一。その墓は鹿兒島にあり。○毛利敬親 長州藩主。夙に、尊攘の説を抱いて、奔走はなはだ勤む。維新の後、出て、朝廷に仕へしことあり。○山内豊信 高知藩主。容堂と號す。人となり慷慨、常に、王室の陵夷を歎じ、政權を一途にせむの志あり。維新の際、功勞最多く、中興の業、一にその首議に基せりといふ。功を以て、從二位中納言

に叙任せらる。明治五年六月廿一日薨す。年四十六。その墓は、高知にあり。○鍋島直正 佐賀藩主。閑叟と號す。嘉永年間外舶の渡來せし時、海岸の警備に心を勞し、また、公武の調和に力を致して、功あり。初め封を襲ぐや、大に藩政を改め、學校を起し、農桑を勸む。士民、これを徳とす。明治四年正月十八日薨す。年五十八。その墓は佐賀にあり。○大久保利通 鹿兒島藩士。甲東と號す。容貌魁偉、果斷沈毅にして、膽略あり。維新の際、大に畫策する所あり。將軍慶喜に勸めて、大政を返上せしめ、又、諸藩をして藩籍を奉還せしめ、以て郡縣制度の基を建つ。維新の後、歐米を巡廻し、歸りて、内務卿に任ず。征韓論起るに及び、その非を論じ、議遂に止む。西南の役後、朝廷金帛を賜ひてこれを賞す。明治十一年五月十四日、兇徒島田一郎等の爲に、東京赤坂紀尾井坂に刺さる。年四十八。勅して正二位右大臣を贈る。その墓は、東京青山にあり。○木戸孝允 長州藩士。松菊と號す。幼にして桂氏に養はる。後木戸に改む。夙に、尊王討幕の大義を唱へ、藩侯に説き、薩藩と連合して、遂に政權を奉還せしめ、以て郡縣の基を建つ。後明治政府に事へ、獻替畫策、大に維新の洪圖を賛け、中興の偉業を大成せしむ。明治十年一月車駕に従ひて、京都に至り、宿痼發して、五月二十六日、その地に薨す。年四十四。墓は、京都靈山にあり。○大赦 國事犯罪人等に限りて、その罪を赦す。その詳かなるは、明治二十二年二月發布勅令第十二號に就いて見るべし。○西郷隆盛 鹿兒島藩士。南洲と號す。幼にして異材あり。長ずるに及びて、名望頗る高し。京都清水寺の僧月照と共に、帝室の式微を歎じ、密に謀る所あり。幕府の嫌疑を受け、身を容るゝ所なく、安政五年十一月十六日の夜、月照と共に薩海に投ぜしが、隆盛獨り蘇生す。維新の際、大に國事に盡

し、功を以て正三位に叙し、參議兼陸軍大將に任ぜらる。明治六年十月征韓の議協はず。病と稱して郷里に歸り、十年二月十五日、遂に兵を擧げて、東上せむとす。連戦利あらず。九月廿四日鹿兒島城山において戰歿す。年五十二。なほ本卷の二四、「功臣の末路」の章を参照すべし。○正三位 明治二十年五月叙位條例を制定して、正一位より從八位に至る十六階の位階を設く。されば正三位は第五階なり。以下これに准じて知るべし。○藤田誠之進 水戸藩士。名は彪。號は東湖。藤田幽谷の子。十四歳にして江戸に出て、武を講じ書を學ぶ。人と爲り聰明英武、忠誠義烈、烈公を輔佐すること十年一日の如し。弘化六年五月、烈公の江戸駒込の邸に幽せらるゝや、東湖また幽せられ、後三年にして許さる。安政二年二月二日江戸大地震の時、屋梁に壓されて死す。年五十。○佐久間修理 實名を啓、號を象山といふ。修理は、その通稱なり。信濃國松代藩の士にして、佐藤一齋翁の門に入りて、儒學を修め、又、西洋の兵學砲術の必要を悟り、蘭學を修めて、門人に傳へたり。元治元年七月十一日京都に於いて、刺客の爲に落命す。享年五十四。○吉田寅次郎 佐久間象山の門人なり。本姓は杉氏、名は矩方、字は義卿、松陰と號す。長州萩の藩士。人と爲り慷慨にして氣節あり。古今の書に通じ、最も兵法に精し。夙に心を宇内の形勢に注ぎ、海外に歷遊して大に爲す所あらむとし、安政元年三月廿七日、伊豆國下田に行き、米艦に投じられたるも、許されず。事幕府に聞え、獄に繋かれ、幾くもなくして許さる。後郷里に松下村塾を建て、書生を養ひ、時弊を痛論して人心を鼓舞せしかば、遂に、幕府の忌諱に觸れ、安政六年十月廿七日、斬に處せらる。年二十九。

三、戸毎の國旗

○作者細川潤次郎氏は、奮高知藩士なり。安政年間、蘭學を長崎に、航海術を幕府操練場に學び、明治四年、藩より撰拔せられて、歐米に留學し、歸朝後、元老院議官、貴族院副議長、女子高等師範學校長、樞密顧問官、文事秘書官長、華族女學校長、學習院長等の官職に歴任し、現に、文事秘書官長を以て、華族女學校長を兼ね。功を以て、特に男爵を授けられ、華族に列せらる。又、選ばれて學士會員たり。著す所、名なし草、梧桐畫話、近世畫史養蘭須知、隱逸全傳、近遊日録、峽程記、毛遊記程、新國紀行等あり。

四、故郷

○青が島 八丈島の附屬にして、八丈島より南、十三里三十町の處、伊豆海島中の極南にあり。東西二十町、南北十二町餘、周回三里許の一小島なり。二箇の村落ありて、八百餘の人口あり。この島は、往昔、鬼が島といひし處にて、鎮西八郎爲朝の流されしもこゝなりとぞ。○南洋 志賀重昂氏嘗て日本の南、赤道線の北なる群島ミクロネシア、南半球の時事を録する(書名「南洋時事」)に當りて、はじめて南洋の語を用るしが、これより、芙蓉峯外の諸群島より迤南、森々たる大洋中に基布せる我が群島、即ち、伊豆七島(大島、利島、新島、神津、三宅、御藏、八丈を伊豆七島といふ)。及び、小笠原群島を總稱して、日本の南洋ともいふやうにはなりぬ。こゝにいふ南洋は、所謂、日本の南洋なり。○火山爆發云々 青が島の噴火は、承應元年以後、今日に至るまで、六七回の多きに及ぶ。その主なるものは、安永九年七月の噴火にして、この時、島民八丈島に遁れしこと、史に見えたり。又、天

明五年三月十日のも、そのおもなるものにして、この時、鬮島焦土となり、住民は、過半焼死し、男女二百二人は、難を八丈島に避け、一島全く無人の境となりしが、天保五年全く歸住せりとぞ。こゝに火山爆發云々とあるは、この時のことをさせるなり。詳しくことは「伊豆日記」に見えたり。○八丈島 北緯三十四度四十七分半にあり。伊豆七島中の最南、東京市を距る、海路一百廿餘里にある孤島にして、東西二里半南北四里、周回十里十三町十八間、七島中の最大なるもの。往古沖の島と名づけ、又、漢土の書に、女護島、女國、女子郷、女人國などいへる、皆この島の異名なり。目下東京府の所管たり。○千島 舊名シリル群島といひて、露領なりしが、明治八年、五月七日、我が樺太を、久里留と交換することの約成りてより、我が所領とはなれるなり。かくてシリル群島の名を千島と改めしは、明治九年一月十四日の事なり。面積殆ど四國と等しく、千三十三方里餘あり。根室國の東北なる國後島より、最北端占守島の間、散布せる大小列島三十二は、恰も、尾を曳きたるに異ならず。その最も大なるものは、國後、色丹、擇捉、得撫、新知、捨子古丹、温禰古丹、幌筵、占守、阿頼度等なり。○占守 千島諸島の最極端にあり。千島海峡によりて、堪察加の南岬露婆吐加岬と相對す。地勢平夷、池沼ありて水草多し。島内純粹の土人生活す。この土人は、黒髮黒種にして、アイヌ人と大同小異なり。言語、亦、甚しく類似の點を見る。一定の職業なく、夏日は海獺を獵し、冬日は狐を獵する程のことあるのみ。皆穴居也。○開拓使廳 北海道開拓使は、明治二年七月八日、局を民部省中に置きしが、同年八月、太政官中に移し、同三年十月十九日、蠣殼町に移し、出張と改む。同四年五月、札幌開拓使廳を置く。同五年九月、札幌本廳と稱す。この本廳

には、長次官、常にあらざ、奏任官、事を執ること、官省の府縣に於けるがごとし。おなじく十五年二月八日廢せらる。○色丹島に移らしめ云々 色丹島は、根室港を距る、約六十里。國後島の東南にあり。その面積小なれども、良港多く、船舶を碇泊するに便なり。地味豊饒、大木罕なりと雖、家材薪炭に用ゐるに足る。禽獸多く産し、昆布、海苔の類、亦少なからず。殖民地として最良の處なりとぞ。又、占守の土人を、色丹島に移住せしめし事實の一斑をいはい、明治十七年六月、内務少輔芳川顯正、參事院議員安場保和、千島巡視として北海道に赴き、同月廿五日根室に至り根室縣令湯地基定と、ともに千島に航し、占守郡占守島に至り、全島土人に諭示し、遂に、これを率ゐて歸り、色丹島に移住せしめき。○米國シカゴ博覽會 イリノイ州なるシカゴ府は、合衆國第二の大都會にして、人口百萬、ミシガン湖の南岸にあり。シカゴ博覽會は、明治二十六年五月一日より同年十月最後の木曜日まで開設せしコロンプス世界博覽會のことをいへり。○エスキモト土人 米利堅の北陔なる、グリーンランド及び、イラスカ州等に住める土人をいふ。その軀軀、甚だ矮小にして、毛髮は黒く、鼻は扁平く、頬骨凸起し、眼目斜にして、皮膚、黄棕色を帯べるなど、亞細亞人種に似たるものありとぞ。○コルシカ 地中海岸にある島嶼の一なり。佛領なれども、人種、國語等は、主に、伊太利的なりとぞ。○ナポレオン ナポレオン第一世、即ち、ナポレオン、ボナパルトは、千七百六十九年八月十五日をもて、コルシカ島に生る。一匹夫より身を起して、歐亞の風雲を叱咤し、遂に、佛國の帝冠を戴き、歐州大陸の諸州、皆、その威を仰ぐに至る。なほ、卷三、九「ナポレオン言行の一二」の條を參照すべし。○三河武士 戰國時代に、徳川氏配下の三河の武士の、勇

壯無比にして、まかも、皆、盡忠の志、堅く、その凛として犯すべからざる風姿、大に時人の注意を引きしより、三河武士といふ名は、まことに理想の武士として、長く、世に名高かりしなり。

五、御國人の風流

○作者物集高見氏 は、豊後の人なり。最も、本邦の語學文法等に精通し、長く、文科大学教授たりしが、明治三十二年三月、文學博士の學位を授けらるゝ程なく、辭職せられたり。著書少なからざる中に、日本大辭林、最も、多く、世に著はる。○日本の人は、日本人の特性習俗等を歴史的に記述したる一小冊子なり。

○照りもせず曇りもはてぬ臘月も 新古今集春歌上に、文集「嘉陵春夜詩、不_レ明不_レ暗臘々月」といへることをよみ侍りけるといふはしがきにて「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の臘月夜に去くものぞなき。」とあり。大江千里の歌なり。文集とは、唐の白樂天の白氏文集にて、その十四の卷に、嘉陵夜有懷二首「露濕_二橋花_一春意深、西廊月上半床陰、憐君獨臥無_二言語_一、惟我知_二君此夜心_一。」不_レ明不_レ闇臘臘月、不_レ暖不_レ寒慢々風、獨臥_二空床_一好_二天氣_一、平明問事到_二心中_一とあるによれり。○八つ橋を架けたれば燕子花も咲くなるべし、八つ橋とこゝにいへるは、泉水などにかけたる屈折したる橋をさしていへるにて、燕子花もといへるは、伊勢物語に「三河國八つ橋といふ處に至りぬ。そこを八つ橋といふことは、水の蜘蛛に流れわかれて、木八つ渡せるによりてなむ、八つ橋とはいへる。その澤のほとりに、木蔭にありて、かれいひ食ひけり。その岸に、かきつばた、いと面白く咲きたり。それを見て

都いと戀しく覺えけり。云々。」とあるをちもひてかけるなるべし。○土佐家 春日基光といふ人巨勢金持より畫傳を受けて、佛畫を工みにす。これより、子孫、代々繪畫を事とするに至れり。基光第四世の孫、光長の男に經隆といふあり。後堀河天皇の寛喜頃の人なり。はじめ、春日有房と稱す。畫所預となり、從五位下、土佐權守に任せらる。畫法を父に學びて、佛像、并に、菅公の像を能くす。この人に至りて、始めて、南都を去り、京都に住し、春日を改めて、土佐と稱す。所謂、土佐家の祖なり。その後昆、連綿として、今日に及ぶ。代々、朝家の繪所となり來れり。彼の有名なる、光信、光起等は、その子孫なり。されど、代々相次いで、高手名人の出でしにはあらず。時には、繪所を預るべきその人の當家になかりしため、他家に預けられしこともあり。今日に至りては、微々としてまた振はず。○狩野家 日本美術の名聲を、十分江湖に發揮せしめ得たるは、實に狩野家なりとす。その祖を、狩野正信といふ。後奈良天皇の天文年間の人なり。正信、姓は藤原、父を狩野次郎景信といふ。伊豆國加茂郡狩野村に住す。畫を好みて、足利義教に仕ふ。正信は、その長男たり。はじめ、畫法を父に受け、上洛の後、如雪を師とし、後、周文の門に入りて研究し、宋人が古逸の氣に追歩する所ありて、遂に、一家を創翫す。足利義政に仕へ、食邑五千貫を賜はる。最も人物に長じ、喜びて、減筆を用ゐたり。有名なる元信は、その子にして、永徳、山樂、探幽等の名家は、皆その後なり。○文人の疎畫 所謂文人畫とは、支那より傳來せる南北兩宗派の畫風をさしていへる稱なり。その畫風、主として、氣韻を尊び、風致に富めるをもて、文事に志あるもの、好みて、これを學び、一時、大に流行したりしが、明治政府の美術獎勵を盡するに當りて、こは、もと、支那の畫風なれ

ば、今、あらためて奨励すべきものにあらず、土佐狩野の如き、わが國固有の畫風こそ、大に奨励すべきものなれとの議行はれ、ために、文人畫は、その勢力を失ひて、今は、殆ど、その後を斷たむとするに至れり。

六、自然の音楽

○作者坪内雄藏氏 は、愛知縣の人。明治九年、東京に遊學し、同十三年、文科大學を卒業す。爾來、力を東京専門學校に盡し、兼て、現時、早稻田中學校の教頭たり。氏はじめ、小説界にその名を成す。明治の小説は、實に氏によりて開拓せらる。號を春の屋隴、又逍遙といふ。又、早稻田文學の主幹として、文藝の批評をつとめ、志がらみ草紙の森鷗外氏と相對して、實にわが文壇の重鎮たり。三十二年三月、文學博士の學位を授けらる。今や、氏は、文學的作物に心を留めざるが如く、專意教育の方面に心を注ぎ、倫理問題に對して、研究する所ありといふ。著す所、書生氣質、妹と脊鏡、シーザー奇談、小説神髓、春の屋漫筆、小羊漫言、文學その折々、桐の葉、牧の方、英文學史等なり。

○琴 樂器中の主なるものにて、本邦固有のもの、支那より舶來せるものとの二種あり。琴といふ六絃の琴は、本邦固有のものにて、箏といふ十三絃の琴は、支那より傳來せるなり。支那にては、漢武帝の時、丘仲之を造れりとぞ。○三味線 三線の字音なるべし。その起源は、諸説異同ありて、一定せず。されど、中古、琉球より渡り來りしを造り改めたるものなるは争ふべからず。或は永祿

年中に渡來せりともいひ、或は、文祿年中なりといふ。琉球にては、三味線の胴を、蛇の皮をもて張りしを、内地には、さる大きな蛇皮なきが故に、猫の皮をもて張ることゝはなせるなりとぞ。

○ビヤノ 原語なり。譯して洋琴ともいふ。西洋の樂器の一なり。外形の構造に三種あり。即ち、立洋琴、三脚洋琴、四脚洋琴是なり。立洋琴は、その絃、立に斜に張るが故に、この名あり。三脚洋琴四脚洋琴、こは、共にその絃は水平にして、その方向は、三脚にありては縦方に、四脚にありては横方に張れり。その形態、殆ど三角にして、四脚は、全く長方形なり。今こゝに、三脚といひ、四脚といふは、その臺脚の數によれるなり。○オルガン これも原語なり。風琴ともいふ。外形、頗る、ビヤノに似たれど、内部の構造に至りては、甚だ異なり。ビヤノは、鐵絃を槌にて撃ち、オルガンは、簧舌を風にて吹くものなり。○松蟲 こほろぎの類、褐色にして、長き鬚あり。腹の色黄なり。野草、及び松杉の籬にありて、夜、羽を振うて鳴く、聲甚だ優美にして、チンチロリンといふが如くに聞ゆ。○胡弓 三味線より小にして、簡便なる樂器の一なり。長さ二尺餘、黒檀又は朱檀にて作る。四絃なり。白又は黒き馬毛をもて弓を張りたるものにてこれをすり、別に撥を用るず。三才圖繪には、南蠻より傳ふといへり。蓋し葡萄牙をさせるならむ。絲竹初心集に、文祿の頃、石村檢校といふもの、これを内地に傳へて、これによりて三味線を作り出せるよしいへれど、いかゞ。但し三味線と殆ど同時に渡り來れるものなるは、稍々信を置くに足れり。○ひぐらし 蜩は、主に山野樹林の中にありて、夏の末、秋の始め、日くれがたに鳴く。其の聲寂寥なり。蟬の一種にて小さく、その色青黒なり。○鈴蟲 こほろぎの類、眞黒色を帯ぶ。松蟲に似て首小さく、尻大きく、脊は窄く

、腹の色は黄白也。夜鳴く聲、鈴を振るが如く、リン／＼といふが如く聞ゆ。其の聲の優しさ、松蟲に劣らず。但し、古の鈴蟲といへるは、今の松蟲にして、今の松蟲といふが、いにしへの鈴蟲なりといふ説あり。○機織 古くははたありめともいへり。その鳴く聲の機を織るが如くなるより、この名あり。或は、その兩脚をとらふる時は、股をかいて働くこと、機を織るが如きより、この名ありともいふ。いなごに似て長さ二寸許あり、青色を帯ぶ。首は尖りて、脚は長く、眼の間は狭くして、その側に二本の硬き髭あり。○こほろぎ 蝗に似て小さく、正黒にして漆の如く光澤あり。翅ありて善く跳ぶ。夏に生れて、立秋後に夜鳴く。好んで土石の下に吟ず。その聲甚だ愛すべし。○笙 支那より傳來せり。禮記に女媧氏始めて笙簧を作れること見ゆ。筒に管を植えならべたる笛の類にて、筒の横の方より吹き鳴らす樂器なり。その大なるは、十九簧ありて、小なるは十三簧あり。簧とは、管中にある金葉の舌やうのものなり。和名抄には、「笙、俗云、象乃布江」とあり。○簫 和名抄に、「比干利岐」と讀ませたり。樂府雜錄に、もと龜茲國の樂なりといへれど、起源詳ならず。雅樂に用ゐる樂器の一也。縦に吹くもの、笛に似たり。竹を管とし、歌口には、蘆舌といふものをつく。九孔或は六孔ありて、大なるは長一尺八寸、小なるは長六寸あり。○尺八 和名抄に、「建書圖云、尺八爲短笛。縦向テ吹者也」とありて、和訓なし。漢の馬融はじめて之を作るといふ。古く支那より渡り來れるものなれど、時代詳ならず。○琵琶 四絃なり。されば、これを古くは四つのをともいへり。仁明天皇の承和年中、掃部頭藤原貞敏、入唐して、琵琶の秘曲を劉二郎に受けしより、始めて我が國に入り來れりとぞ。こは、三代實錄貞觀九年の條に見えたり。支那にては、漢

の武帝の時、烏孫公主、始めてこれを造れりといひ傳へぬ。○月琴 その形、大かた、琵琶に類す但し、琵琶にては、その胴、楕圓形なれども、月琴は正圓なり。四絃十二柱。支那の樂器なり。

七、花と蟲

○トリニグツト島 南亞米利加洲、東方にある一小島にして、英領なり。面積二千方哩、人口六萬八千六百。○その色の似通ひたるによりて 卷二、二六「動物の保護色」の條の本文に詳なり。○こゝに一の作用起りて、雄蕊の花粉、雌蕊の柱頭に觸るゝ時は、そこに受精の作用起りて、果實の生ずるをさせり。○有機界 有機とは、化學上の語にして、すべて、動物植物などの、生活機能を具備するをいふ。無機に對していふ。有機界とは、有機物すべてを包含していふものなり。

八、熱地に於ける蜜蜂

○作者大槻文彦氏 は仙臺の人、嘗て、職を文部省圖書寮編纂課に奉じ、後、職を辭して、著作に従事すること多年。明治三十二年三月、文學博士の學位を授けらる。氏の著述に係る最も主なるものは、辭書「言海」、及び、廣日本文典なり。
○濠太利亞 南緯 自零度 東經 自百十二度 世界第一の大島なり。東西二千五百二十哩、南北一千九百六十哩。面積二百四十二萬千方哩略にして、歐羅巴の四分の三に當る。英の屬地なり。西曆千六百〇五年、和蘭人、始めて、この地を發見し、名づけて、新和蘭とす。千八百三十五年議定して、埃太刺利と改め、英國の殖民地となる。

九 小笠原島通信

○作者田口卯吉氏 は舊静岡藩士、安政二年四月、江戸に生る、英書醫術經濟學を修む。嘗て、大藏省に出仕し、後、辭して、民間の事業に従事し、又選ばれて代議士となる。三十二年三月、法學博士の學位を授けらる。氏又、文章の才あり。號を鼎軒といひ、著書尠からず。その主なるものは、日本開化小史、自由貿易、日本經濟法論、經濟策、樂天錄等なり。

○小笠原島 東京品川灣より、直航海路、凡五百三十餘哩にして、北緯二十六度三十分に起り、同度二十分の間に散布す。文祿二年、小笠原貞頼の發見する所なるをもて、この名あり。その後、久しく放棄してありしが、明治九年に至りて屬島と定めたり。貞頼の發見せし當時は、その人跡なきをもて、人無島、巽無人島、無人島等の稱ありき。諸島の位置、南北に亘り、大小二十餘島、星羅棋散す。そのうち、最大なるものを、父島、母島とす。兄弟姉妹の諸島これを環り、小嶼その間に點綴す。各島、總て、高突なる斷崖絶壁にして、熱帯の樹木、繁茂鬱蒼、これを遠望すれば、畫面の觀をなせり。日本の人民、異邦の民、生息す。○五月十五日 明治二十三年のことなり。○八哩半壹マイルは、我が十四町半十三間餘に當る。○バインアップル 英語にして、松様萃菓の義なり。其の果實の外邊は、全く三角形の細鱗を以て被包せられ、恰も、松樹の圓錐子に類似せるよりこの名あり。伯西爾、東印度、西印度等の熱地に産する植物なり。小笠原島にては、元來、洋人の外、之を栽培するものなかりしが、近來は大に繁殖せり。草木にして、莖三尺餘に至る。菓實は、食用に

供す。○バナ、芭蕉の一種、花は紫色なり。琉球、又、小笠原島等に産す。その實は、黄色にして長さ四寸ばかりあり。皮を去りて食用に供す。至りて軟かにして、味甘く、且つ芳香あり。又、火酒及び酢を製するにも用ゐるとあり。○珈琲 もと、亞弗利加のカップ、ハの地より産せるをもてこの名ありとぞ。それより、アラビヤ、和蘭、亞米利加等に移し植ゑられて、今は、各地に産せり。灌木にして、其の實は大豆位あり。色は、黄、鼠等あり。炒りて粉末とし、飲料に用ゐること茶の如し。○マニラタコの木 高さ三四丈あり。幹より、七八箇の氣根を地中に投ずること、章魚の足に似たり。葉は、蔗、或は、提藍等を編み、根は、索となる。熱地の産物なり。小笠原島にては山中至る所に林立す。○海軍省 維新のはじめ、大寶令の制を斟酌して、太政官を置きしが、明治十八年、太政官を廢して、内閣を設け、十省を定む。海軍省は、この十省の一なり。海軍大臣は、海軍軍政を管理し、海軍々人軍屬を統督し、所轄諸部を監督す。○風帆船 蒸氣の力によらず帆によりて航海する、西洋形の船をいふ。○油桐 桐の類。葉は、尖りありて、その尖りは、三、五、或は、七なるもありて、鋸齒なし。實は、八九分許、圓くして扁平なり。毒あり。搾りて油を採る。桐油、即ちこれなり。山桐、大桐などいふは、皆、油桐の別名なり。○カナカ人種 南洋ミクロネシア群島の人種なり。○カヌー船 またカノーともいふ。原語なり。即ち、獨木船小船の一種なり。○正覺坊 うみがめともいふ。海産にして、龜の類の最も大なるもの。四足皆齧にして爪あり。前足長く、後足短し。甲の色は黒くして、黄色なる斑あり。肉、脂、皆食用となる。瑇瑁に擬製して、朝鮮龜甲といふは、この龜の腹の甲によりて造られたるなり。○天祐丸 田口卯吉氏等、小笠原島水

産事業に當らむがために、南島商會を組織せることあり。天祐丸は、そのために、買ひ入れられたるスクーナル形風帆船にして、噸數九十一噸三七。事、南島巡航記に委し。序でにいふ、船の名は何丸と名づくることは、齋藤彦磨の『傍廂』に、「船の名を何丸と名づくること、或人の説に、まろは、もと卑下の詞にて、みづからの事をまろといへるは、我といふ義にて、俗に拙者私などいふと同意なり。さる故に、みづからの名を何磨、某丸と稱せしむ、卑下の稱なるを、後には、親しみていふ詞となれり。草薙鎌を鎌丸といひしと、萬葉集の歌にあり。されば、身の守りとして頼み思ふ劔刀の類に、小鳥丸、鬼丸、友切丸などの名あり。さて、後々は、親しみ詞が美稱となりて、小兒の名に、何丸と號けたるが、又、後には、高貴の嫡、また寺院の兒童にのみありて、凡下の少童には憚るべき事となりけり。大船を何丸と號けしむ、萬里の波濤を渡る故に、命にかけし名なりしを、後又美稱となりて、小さき船には、號けがたきこととなりけり。又、城廓に、本丸、二の丸、出丸などいへるも美稱にて、凡下の家の構へなどには、いはぬことなり。されば、丸は、卑下より親愛に移り、親愛より美稱にうつりたるなり。外に故あるにあらず。云々」○定期船 すべて、或る港より或る港までの間を、一月幾回とか一年幾回とか、その期日を定めて航海するを定期航海といひ、その向ふべき目的地に従ひて、その用船も、大概一定せり。例へば、歐洲行なれば大船をあて、近海なれば、小船なるが如し。これを定期船といふ。○島司 一島を管轄する處を島廳といふ。島廳には、島司、島廳書記、島廳視察等を置く。島司は、一人にして、奏任なり。知事の指揮監督を受け、全島の行政を掌る。

一〇、黃海の戰 その一

○黃海 支那山東省と朝鮮黃海道との間にある海なり。○山縣陸軍大將 山縣有朋侯なり。天保九年閏四月二十二日、長州萩に生る。維新の際、王事に奔走し、後、明治政府に事へて、もろもろの要職に任せられ功勞あり。功を以て、特に華族に列せられ、侯爵を授けらる。現に、陸軍大將を以て、元帥の職にあり。○佐世保 肥前國東彼杵郡にある軍港なり。○仁川 朝鮮京畿道にある港なり。○大同江 朝鮮平安道の南部を流る、河なり。○平壤 平安道にありて、大同江に沿へり。○松島 二等巡洋艦。艦質、鋼鐵。排水量、四千二百七十八噸。速力、十七ノット五。砲數、三十四門。乗組定員、三百五十五人。進水、明治二十三年。○旗艦 司令長官の乗り組める艦にして、その官等を表する旗章を掲げたるものなり。○千代田 三等巡洋艦。艦質、鋼鐵。排水量、二千四百三十九噸。速力、十九ノット。砲數、廿七門。乗組定員、三百〇六人。進水、明治廿三年。○殿島 二等巡洋艦。艦質、鋼鐵。排水量、四千二百七十八噸。速力、十七ノット五。砲數、三十四門。乗組定員、三百五十五人。進水、明治廿二年。○橋立 二等巡洋艦。艦質、鋼鐵。排水量、四千二百七十八噸。速力、十七ノット五。砲數、三十四門。乗組定員、三百五十五人。進水、明治廿四年。○比叡 三等海防艦。艦質、鐵骨木皮。排水量、二千二百八十四噸。速力、十三ノット。砲數、九門。乗組定員、二百八十五人。進水、明治十年。○扶桑 二等戰艦。艦質、鐵。排水量、三千七百七十七噸。速力、十三ノット二。砲數、十五門。乗組定員、三百四十五人。進水、明治十年。○赤城 二等砲艦。艦質

鋼鐵。排水量、六百廿二噸。速力、十二ノット。砲數、四門。乗組定員、百二十八人。進水、明治廿一年。○西京丸 日本郵船會社の所有に係り、神戸丸の姉妹船なり。商船としては、構造堅固、船艙美麗なり。○遊撃隊 豫め、部署を定めず、臨機應變に、味方を助くる軍隊をいふ。されば、吉野、高千穂、秋津洲、浪速等の、比較的速力を有する諸艦をもて、之に當てたり。○吉野 二等巡洋艦。鋼質、鋼鐵。排水量、四千二百六十七噸。速力、二十三ノット二。砲數、三十四門。乗組定員、三百八十五人。進水、明治二十五年。○高千穂 二等巡洋艦。鋼質、鋼鐵。排水量、三千七百九噸。速力、十八ノット七二。砲數、二十門。乗組定員、二百五十二人。進水、明治十八年。○秋津洲 三等巡洋艦。鋼質、鋼鐵。排水量、三千五百十噸。速力、十九ノット。砲數、十九門。乗組定員、三百十四人。進水、明治廿五年。○浪速 二等巡洋艦。鋼質、鋼鐵。排水量、三千七百〇九噸。速力十八ノット七二。砲數、二十門。乗組定員、三百八十五人。進水、明治廿五年。○海洋島 黃海の北部、威海衛の北、旅順口の東に當る所にある小島なり。○大鹿島 海洋島の西方にある小島なり。○北洋艦隊 清國に、北洋、南洋、福建、廣東の四艦隊あり。北洋艦隊は、即ちその一なり。○定遠、鎮遠 共に、鋼質、鋼鐵。排水量、七千三百三十五噸。速力、十四ノット五。砲數、廿二門。乗組定員、三百三十人。進水、明治十五年。○來遠、經遠 共に、鋼鐵艦にして、排水量、二千九百噸。速力、十五ノット五。砲數、十四門。乗組員、二百〇二人。進水、明治廿年。○致遠、靖遠 共に鋼鐵艦にして、排水量、二千三百噸。速力、十八ノット。砲數、二十三門。乗組員、二百〇二人。進水、明治十九年。○揚威 鋼質、鋼鐵。排水量、一千三百五十噸。速力、十五ノット五。砲

數、十八門。乗組員、百三十人。進水、明治十四年。○超勇 鋼質、鋼鐵。排水量、千三百五十噸。速力十五ノット。砲數、十八門。乗組員、百三十人。進水、明治十四年。○威遠 鋼質、鋼鐵。排水量、千三百噸。速力、十二ノット。砲數、十一門。乗組定員、百廿四人。進水、明治十年。○濟遠 鋼質、鋼鐵。排水量、二千三百噸。速力、十五ノット。砲數、十八門。乗組員、二百二人。進水、明治十六年。○廣丙 鋼質、鋼骨木皮。排水量、千百十噸。速力、十七ノット。砲數、十六門。進水、明治廿四年。○平遠 鋼質、鋼鐵。排水量、二千二百噸。速力、十四ノット五。砲數、十一門。乗組員、不詳。進水、明治廿一年。○水雷艇 敵艦を破碎する所の水雷を發射する小さき艇なり。○單縱陣 艦隊の諸艦が、縦に、一列になりて、陣をとりたるをいふ。○米突 佛蘭西にて用ゐる尺度の單位。(軍隊においては、普通に佛尺を用ゐる)。地球の赤道より極までの長さの一千萬分一、即ち、わが三尺三寸に當る。されば、六千米突は、一里十九町にして、三千米突は、二十七町三十間なり。○坂元少佐 名は八郎、鹿兒島藩士。安政五年四月生る。年十九にして海軍に入り、明治二十三年少佐に進む。明治二十七年九月、黃海の戦に死す。年四十一。○樺山軍令部長 名は資紀。鹿兒島藩士。天保八年十一月十四日生る。明治政府に仕へて、現に海軍大將從二位勳一等功二級伯爵たり。海軍軍令部は、國防及び用兵に關する事を掌る所とす。

一一、黃海の戦 その二

○外裝水雷 圓材の終端に、綿火薬を附着し、これを汽艇に載せ行きて、爆發薬を敵艦に觸接せしめ、

或は二三尺の距離に置きて、これを發火せしめ、以て敵艦を破碎し、自らは逃れ去る法なり。○大連灣 支邦盛京省の南海岸にあり。○トラファルガルの戦 西曆千八百五十年十月廿一日、英將ネルソンが、ナポレオン一世の配下なる佛蘭西西班牙聯合艦隊を、大にトラファルガルの海戦の條、参照。○伊東司令長官 名は祐亭。天保十四年五月薩南に生る。現に海軍々司令部長大將正三位勳一等功二級子爵なり。廿七八年の役には、聯合艦隊司令長官たりき。○櫻井少佐 名を規矩之左右といふ。駿河の人、海軍兵學校出身たり。現に、海軍少將たり。○噸數 軍艦の噸數とは、所謂排水噸數にして即ち艦の水中に沈むために四方に排せられたるたけの水の重さをいふなり。一噸は清水三十立方呎の重さにして、凡そ我が二百七十貫に當る。されば、六百噸は、十六萬二千貫なり。○甲板 カンバと讀む。唐音なり。大船の上なる床の一面に板を張りつめたる處をいふ。○舵機 甲板の上に設けられたる、舵をとる機械なり。○舵樓 舵機のある處なり。

一二、海外の一知己

○勝海舟談話筆記、こは、書名にあらざ、ある人の、勝伯を訪問して、その談話を筆記せるものによれるなり。

○勝海舟翁 通稱勝太郎また安房守と稱し、後安芳と稱す。文政六年正月江戸に生れ、幕府に仕へて、瓦解の際、大功あり。明治政府に仕へて、海軍卿となり、後、樞密顧問に任せられ、伯爵を授

けらる。三十二年薨す。年七十八。○氷川邸 東京赤坂氷川にある、勝氏の邸なり。○丁汝昌 支那北洋艦隊水師提督なり。明治二十四年七月、我國に來航したるとあり。二十七年黄海の戦に兵器軍艦を我國に納れて自刃す。○李氏 李鴻章なり。鴻章、字は少荃、道光三年(文政四年)、安徽省合肥縣に生る。道光二十七年、進士の第に中る。福建延郡の道臺、江蘇省巡撫、直隸總督等を總て、總理衙門に入り、後、兩廣總督となり、再び直隸總督となり、北洋大臣、内閣大學士を兼ね。明治三十四年十一月七日、歿す、享年七十九。清帝、哀悼の意を表し、特に、侯爵を贈らる。○海軍歴史 勝海舟翁の著、二十五卷あり。明治廿二年十一月二日、海軍省より出版せらる。徳川幕府海軍の創始より、慶應末年(英國海軍教師傳習中止の時)に至る間の事を記したる書なり。○提督 職權、我が艦隊司令長官に同じ。○威海衛 山東省の東部にある軍港なり。旅順口と相對して、渤海灣の咽喉たり。

一三、水浴

○羅馬の國民 三世紀四世紀に亘りて、地中海沿岸を悉く統一して、一時最も繁盛を極めたり。由來伊太利の民族は、ラチニ、サピニ、ウムフリ、サムニテ等の種族に分る。ラチニは、チベリス河をもて、エトルスキと界し、夙に、その河畔に一殖民地を起し、サピニ及びエトルスキの二村落と相合して、一府をなせり。これ即ち、ローマ府にして、今の、伊太利の首府なり。こゝに羅馬の國民といへるは、即ち、古昔羅馬國の國民を指せるなり。○チベリス河 ローマ府は、その河畔にあり。

史上著名なる河なり。○我が國民が、古來清きを好む性ありて、伊邪那岐命、伊邪那美命を慕ひ給ひて、黄泉國に往きて、歸りまし、時、吾は穢き國にありけりとの給ひて、日向の橘の小門の阿波岐原に出でまして、身を清め給ひしを始めて、我が國に古來禊祓といふことの多く行はれたるによりても、古より我が國民の、清きを好む性あるは、明かなり。○彼の西洋各國に見る如き悪性の皮膚病少なく、西洋人は、入浴するには、日本人と異なりて、多くの費用を要するより、數ヶ月に、一二回入浴するのみなりとぞ。これ、西洋人に悪性の皮膚病多き所以ならむといへり。○神經は、白色の纖維集合して成れる一の索條にして、腦髓若しくは脊髓より出て、體內各處に分布し、以て、腦脊髓に外物の感覺を奏し、或は、腦脊髓より令を受けて、體軀を運動せしむるものなり。○道後温泉云々、道後の温泉は、愛媛縣松山の近傍にあり。道後温泉の、正史に見えたるは、日本書紀の舒明天皇の條に、「十一年冬十二月、己巳朔壬午、幸于伊豫温湯宮」とあるを以てはじめとす。されど、風土紀に、「凡湯之貴奇、不神世時耳、於今世染疹痼、萬生爲除、病存、身要藥也、天皇等、於湯幸行降座五度也、以大帶日子天皇與大后入坂入姬命二軀爲一度也云々」とあるは、伊豫の温泉のいづれなるかは、漠然たるやうなれども、或人は、これを道後の温泉なること疑ふべくもあらぬよしを考證せり。それを正しとすれば、道後の温泉は、既に、今日より千八百餘年前、景行天皇の時、行幸の恩光を蒙りたること明かにて、その發見は、なほ上代にありしなるべく、隨ひて、本邦第一の古き温泉たり。○オゾン、酸素の變態にして、雷鳴の後などに多く生ずるものなり。人爲的にもこれを作ることを得べし、それは純粹の酸素瓦斯中に平流電氣を通ずる時は、酸素は、漸く

その容積を減じ、その一部は變化して、烈しき臭氣を有する瓦斯となる。これ即ちオゾンなり。總じて、この瓦斯は、空氣と濕りたる燐との作用、及び、その他種々の化學的反應によりて生ずるものなり

一四、奇遇

○獨逸 歐羅巴の中央にある一強國にして、北はバルチック海、北海及びデンマルクに、東及び南は、ロシア、オーストリア、及び、スヰツルに、西はオランダ、ベルギー及びフランスに接す。面積三萬五千餘方里。人口五千二百萬。立憲政體にして、帝國なり。○ライン河 歐羅巴二大河中の一にして、長さ八百哩、西部歐羅巴の大水路にして、數多國民の貿易及び旅行に便を與ふ。アルプス山脈と、チザールランドの間にある高原を通過せり。○搖籃 小兒を入る、寢籠にして、上より吊して揺り動かすやうになせるものなり。

一五、森林

○作者横井時敬氏 は、熊本縣の人、東京駒場農學校に學び、後、農科大學教授に任ぜられ、農學博士を授けらる。その著に、『栽培汎論』『農業汎論』『農業讀本』等あり。○西班牙 この國はその海運の發達せるによりて、嘗て、世界の最強國として、世に稱せられしが、今は、最弱國の一となれり。歐羅巴の西端にありて、東は、地中海、西は、大西洋に面し、シブラルタルの海峡を隔て、亞弗利加に相對す。大陸の西班牙、バレアリツク諸島、カナリー諸島、及

び、北アフリカに於ける狭小なる一陸地を合すれば、面積、凡そ、十九萬八千方哩。人口、凡そ、千七百萬あり。立憲王國なり。○福岡縣の洪水 此は、明治二十二年七月五日の大洪水にして、その最も甚しきは、筑後川の暴漲にて、その沿岸、久留米、及び、三潁、山本、御原、御井、竹野、生葉、下座、上座の一市八郡は、渺茫たる一湖海の狀をなせり。但し、事、白晝にありしかば、人畜の死傷、比較的少なりきといふ。○和歌山縣の洪水 此は、明治廿二年八月十八十九の二日間、於ける洪水なり。和歌山市及び名草、海部、有田、日高、西牟婁、東牟婁、那賀、伊都等の諸郡、浸水のたみ、家屋の倒潰、人畜の死傷等少なからざりきといふ。○壩土 粘土と砂と火山灰との混合にして、且つ、動植物質を交へ、多少、酸化鐵をも含みて、褐色をなせり。

一六、汽車の旅

○作者佐々木高行氏 は、舊高知藩士なり。維新の際に、功勞あり。明治政府に仕へて、歴任、工部卿に至り、伯爵を授けらる。今は現に、樞密顧問官たり。

○鎌倉小田原の往事 鎌倉は、源氏北條氏が覇府を開けりし所。小田原は、後の北條氏が居城のありし所。往事とは、それ等の事なるべし。○承久の難 承久三年四月、後鳥羽上皇、北條氏の專横を惡みて、兵を擧げられしが、事成らずして、隱岐に幽せられ給ひしをいふ。○中納言宗行卿 左大辨藤原行隆の子なり。累官して右大辨藏人頭に至り、參議に任ぜらる。建保六年更に權中納言となる。承久の役に謀に預り、執へられて六波羅に送られ、薙髮す。尋で鎌倉に送らる。途、遠州菊

川に至り、逆旅の柱に題して曰はく、「昔南陽縣菊水汲下流延齡、今東海道菊河宿西岸失命」と。遂に駿州燒津原にて殺さる。年四十八。○源平對陣の古 治承四年源賴朝兵を關東に起すや、平維盛、兵を率ゐてこれを撃ち、富士川の西岸に陣す。賴朝進みて、その東岸に至る。賴朝の臣武田信義、夜、平軍を襲ふ。水禽驚き起つ。平軍、以て源氏の兵、大に至るとなし、戦はずして逃れ去る。○雪舟云々 雪舟は、備中赤濱の人、幼にして僧となる。最も、畫を善くす。寛正年中(一説に、應仁元年)、明國に渡來し、能畫の師を求む。その畫を視るに悉く意に協はず。曰く、明國、師とすべき人なし。唯、明國名勝の地は、我が師なりと。是より、山水遠寺、晚鐘瀟湘の風景を摸して怠らず。遂に、奇畫を爲す、明主、その美を賞し、敕して禮部院の壁に畫かしむ。又、その國人の請に應じて、本朝田子の浦の景色を畫く。當時の鴻儒詹僊、爲に讚を作りて、これを賞せしことあり。○瀟湘 水の名湖南省なる洞庭湖の南に在り。湘水は、永州府北を流れ、湘江に至りて瀟水と合す。河水清澄、十尋の底を見るべし。この地、實に風景の絶佳なるより、瀟湘八景の名あり。本邦にて、近江八景、金澤八景などいへるは、これに倣ひて、つけたるなり。

一七、今日の陸海軍 その一

○作者竹越與三郎氏 は、新潟縣の人三又と號す。同人社、慶應義塾等に學び、業成つて後、新聞記者として文名あり。嘗て文部省に入つて文部省勅任參事官に任ぜられしが、後辭して、民間に下れり。その著に二千五百年史、支那論、新日本史、等あり。人民讀本は、少年少女に、國政

に關して一通の辨識を與へむがために著されたる書なり。

○徴兵検査官 徴兵検査官は、所管師團の軍醫二名、聯隊區司令官、及び、その屬僚をもて組織す。
 ○小隊 凡そ四十人を一小隊とす。○北海道屯田兵 北海道にては、そのはじめ、開墾と兵備とをかねて、屯田兵を置き、平時は、農業に従事し、事ある時は兵役につきしむるやうの制度なりしなり。今は、徴兵令を布きて、第七師團となれり。○臺灣守備隊 臺灣には、未だ徴兵令布かれざるを以て、全國各師團より、交る／＼その一部を割きて、混成隊を組織して、派遣し、守備に任せしむることとなり居れり。○對馬警備隊 第六師團に屬せり。警備隊司令官は、師團長に隸し、在島陸軍諸隊を統率し、警備隊區内の警備隊保護に任ず。

一八、今日の日陸海軍 その二

○成歎驛 忠清道の北端、京畿道に近き處にあり。○木口小平當時の喇叭卒は、白神源次郎なり、とは、世の一般に傳ふる所なれど、そは、白神にあらざして、木口小平なりといふ説あり。されど今、その傳記詳かならず。

一九、今日の日陸海軍 その三

○大元帥 天皇陛下は、すべての軍隊を統御し給ふを以て、かくいへるなり。軍人に下し給へる勅諭中に、「朕は、汝等軍人の大元帥なるぞ」といひり。

二〇、少年時代の苦學

○作者加藤弘之氏 は、但馬國出石の藩士なり。天保七年二月廿三日を以て生る。明治の後、大學大丞、元老院議員、東京大學總理等となり、文學博士の學位を授けらる。又、帝國大學總長、貴族院議員、宮中顧問官等に擧げられ、勳功によりて、華族に列し、男爵を授けらる。

○高島秋帆 本書卷六の、廿二、「高島秋帆」の條、参照。○佐久間象山 本卷「憲法發布」の條に出てたり。○亞米利加の使節云々 孝明天皇の嘉永六年(紀元二千五百十三年)米國の使節、水師提督ペルリ、兵艦四艘を率ゐて、浦賀に來り、國書を呈して、交易を開かむ事を請ひしこと、史上に詳なり。○蕃書取調所 今の所謂、洋學校にして、萬延元年に設けられたるものなり。

二一、新聞紙の初期

○岸田吟香 現時、東京にて、屈指の賣藥商たり。天保四年、美作國に生る。和英對譯字書は、我が邦に於ける對譯字書の嚆矢なるが、そは、氏が、米國人ドクトル、ヘボン氏と共に三年の間に編纂せられたるものなりとぞ。○栗本鋤雲 飽庵と號す。昌平黌に入りて漢學を修む。幕府に仕へて功勞あり。維新以後、すべて仕を辭し、報知新聞の記者となる。明治三十年三月六日歿す。年七十六。○成島柳北 次の、「新機社製造場を觀る記」の條に畧傳を擧げたれば、こゝに畧す。○福地櫻痴 長崎の人。明治初年新聞記者として名あり。現時、専ら、文學に心を注ぎ、脚本作家として名

あり。本書卷七、二十一、「尼法師」の條にも、畧傳を掲げたり。

一二二、新燧社製造場を觀る記

○作者成島柳北氏 は、幼名は温、後、弘と改む。天保八年二月甲子生る。江戸の人。幕府に仕へて從五位下大隅守に任じ、參政に列す。明治元年致任歸農。七年九月朝野新聞社に入りて、その主筆となる。十七年十一月三十日歿す。年四十八。

○瞳若 熟視緘黙して呆然たる意なり。莊子に、『夫子奔逸絕塵、而回瞠若于後』とあり。

一二三、化學者ブンゼンの逸事

○西曆一千八百九十九年 我が明治三十二年に當る。○アンゼンランプ アンゼン氏の發明せるものにして、化學實驗室にて、あまねく用ゐらる。○ハイデンベルヒ 獨逸の地名にして、ブンゼン氏の實驗室のありしところ。○アスバラガス 英語、百合科中の一屬なり。副食物として用ゐらるゝサラタのごときものなり。○カコヂル 藥品の名、爆發性のものなり。

一二四、ポアソナードを送る詞

○作者井上毅氏 は、梧陰と號す。熊本の人。法典の起草に與りて殊あり。正三位文部大臣に進む。明治廿七年八月病を以て辭職す。翌年一月子爵を授けられ、その三月十三日薨す。年五十二。人となり峻嚴謹直、周密にして學を好み、文と善くし、書に巧なり。當時の勅令憲章の草案多くは

その手稿に係るといふ。『梧陰存稿』は、氏の遺稿にして、明治二十八年九月出版せり。

○ポアソナード 佛人。司法省御雇として、法典編纂に功あり。○永田町 東京麴町區にあり。○山田司法大臣 名は、顯義、舊山口藩士。維新の際、功勞あり。陸軍中將に任ぜられ、伯爵を授けらる。後司法大臣として、法典の編纂に力を盡せり。明治廿五年十一月十四日、病を以て薨す。年四十九。○秘書官栗塚君 秘書官は、大臣に專屬して、文書往復、その他官房内の庶務を掌理す。但し省務の現況により、書記官、又は各部署の事務を補助することあり。栗塚氏は、名を省吾といふ。東京の人。現時、官をやめて。辯護士業務に従事す。

一二五、勸學 その一

○作者落合直亮氏 は、武州多摩郡の人。落合直澄氏の兄にして、直文氏の養父なり。維新の際、大に勤王を唱へ、その功の著るべきもの多かり。一時、顯官にあげられしが、後、退いて、専ら、子弟の教育に従事せり。國學にくはしく、著書もすくなからず。明治二十八年十二月十二日歿す。年六十八。

一二六、勸學 その二

○作者高崎正風氏 は、舊鹿兒島藩士、夙に、歌學を八田知紀翁に學ぶ。維新の際、功勞ありて華族に列し、男爵を授けらる。現時、從三位勳一等樞密顧問官兼御歌所長たり。

二七、精神

○作者谷干城氏 は、舊土佐藩士、天保八年二月生る。十年の役、特功あり。陸軍中將に任ぜられ、又、農商務省大臣となれり。華族に列せられ、子爵を授けらる。今、貴族院議員たり。

○日本魂 日本人の魂といふ意にて、清廉潔白、高尚優美、忠勇義烈などの義を含める語なり。

○山崎闇齋 名は嘉、字は敬義、通稱は嘉右衛門。京都の人。初め僧たりしが、野中兼山谷時中に知られて經書を學び、遂に儒となり、専ら程朱の學を奉じ、吟域を設けて博覽を喜ばず。詩文を好まざ。晩に神道を吉田惟足に學ぶ。天和二年九月歿す。年六十五。

○孔子 支那東周靈王の二十一年（神武紀元百十年）魯の昌平に生る。東西に奔走して、堯舜の道を祖述す。敬王の四十一年卒す。年七十三。

○孟子 支那の賢人なり。鄒の人。業を子思（孔子の孫）の門人に受く。齊の宣王、梁の惠王に事へしかども、用ゐられず、退いて、孟子七篇を作り、孔子の意を祖述す。

○物徂徠 荻生氏。姓物部を略し物と稱す。名は双松、字は茂卿、通稱總右衛門。徂徠と號す。江戸の人。幕府の儒官なり。始め洛閩の學を奉ぜしが、後一家の説を立て、銳意復古の學を唱へ、専ら聖學を興隆するを以て任とし、名聲一世を震動す。享保十三年正月十九日死す。年六十三。

二八、功臣の末路 その一

○西郷隆盛 本書卷の一、二、「憲法發布」の條に畧傳あり。参照すべし。

○參議 大納言につぎて

て天下の政治に參議する官なり。文武天皇大寶二年、始めてこれを置く。その後沿革あり。明治の初年一たびこれを廢せられしが、二年七月八日またこれを置かる。四年七月納言廢せられて後、大臣につぎて樞要の官となる。

○征韓論 朝鮮は徳川氏の時、將軍の襲職毎に、必ず來聘せしによりて維新の初、朝廷より使節を遣して新政を報じ、舊好を温めむとせしに、彼れ、その使節を卻けしのみならず、言また無禮なりしかば、陸軍大將西郷隆盛等大に怒り、征韓の議を唱へ、自ら正使となり、陸軍少將桐野利秋は副使となりて、朝鮮を討たむことを主張す。然るに、この時、歐米より歸朝したる岩倉具視、木戸孝允、大久保利通等、内治を先にして、外政を後にすべきことを論じ、征韓の議を排す。時に、參議江藤新平、副島種臣、後藤象次郎、板垣退助等は、隆盛とその説を同じうす。然るに、遂に征韓の議行はれざるより、征韓を主張せるもの、皆職を辭し、或は、本國に歸る。之を征韓論といふ。

○佐賀の亂 明治七年二月一日、江藤新平、島義勇等、征韓、封建、攘夷を名とし、兇徒二千五百餘人を嘯集して、亂を佐賀に起し縣廳を襲ふ。九日、參議内務卿大久保利通に命じて、往きて之を鎮撫せしめ、ついで、陸軍少將野津鎮雄をして、兵を率ゐて熊本に赴かしむ。二十三日嘉彰親王を征討總督とし、陸軍中將山縣有朋を參軍とし、兵を率ゐて賊を討せしむ。到るに先だち賊平く。四月十三日江藤島の二人を梟し、その餘、斬以下差あり。これを佐賀の亂といふ。

○熊本の亂 明治九年十月廿四日、熊本縣士族大野鐵平（時に太田黒伴雄と稱す）加屋齊堅、上野謙吉等、その黨二百餘人を聚め、敬神黨と稱し、この夜火を放ちて鎮臺を襲ふ。翌日鎮臺兵これを討つ。鐵平、齊堅、謙吉等これに死し、餘黨皆平く。之を熊本の亂といふ。

○秋月の亂 明治九年十月廿七日、福

岡縣士族宮崎庫之助、今井百太郎、益田政方等、舊秋月藩士四百餘人を募りて、熊本の賊に應ず、幾ばくもなくして、宮崎自刃し、今井益田等縛に就き、餘黨悉く平定す。これを秋月の亂といふ。

○私學校 明治六年十月、隆盛、官を辭して國に歸り、私費を投じて、薩藩の子弟を集め、學校を興す。これを私學校といふ。世その生徒を指して、私學校黨と稱せり。

○砲兵屬廠 陸軍省に屬して銃砲彈藥を製造する所。屬廠は支廠なり。當時、本廠は、東京にあり。

○造船所 海軍省に屬して船艦を製造修繕する所なり。

○警視廳の警部 警視廳は、内務省の指揮監督を受け、東京府下の警察、消防、監獄、及び、高等警察等の事務を掌る。明治七年一月十五日、始めてこれを置けり。警部とは、警視廳の職員にして、判任官なり。

○中原某等云々 警官中原尙雄、園田長照、野間田兼一以下廿餘人、學生平田才七、大山綱介等と共に明治九年十月薩摩に歸省し、各、その郷里に於いて、朋友故舊に遊説する所あり。私學校の動靜を政府に報せむとてなり。

○縣令 明治四年七月十四日、藩を廢して縣を置き、その十月廿八日縣知事を置き、十一月二日、縣知事を改めて縣令とす。地方の長官なり。

○大山綱良 鹿兒島の人。島津侯に事へて茶坊主たり。武技に長ず。戊辰の役軍功あり。後鹿兒島縣令となる。明治十年の役、賊に黨して官金十五萬圓を出し、以て軍資に充つ。事、朝廷に聞え、斬に處せらる。

○海軍大輔 明治五年二月廿八日、兵部省を廢して海軍省を置く。その長官を卿といひ、次官を大輔少輔といふ。

○河村純義 舊鹿兒島藩士。現に樞密顧問官海軍中將從二位勳一等伯爵なり。

○内務少輔 明治四年七月二十七日、民政部を廢し、六年十一月十日内務省を置く。長官以下、前肥海軍省におなじ。

○林友幸 舊長州藩士。今樞密顧問官子爵を以て、皇女御養育掛

を兼ねぬ。

○有栖川熾仁親王 熾仁親王の第一子。威儀端嚴にして大度あり。夙に力を國事に致し、明治中興の元勳たり。孝明天皇及び今上天皇に歷事し、陸軍大將參謀本部長に進む。明治二十七年夏、清國を征するに當り、奏して大計を定む。九月大霧を廣島に進めらるゝや、扈從して西下し、日夜帷幕に待す。たま／＼病に罹られたるも、軍國多事に際するを以て、一日も怠り給はず、二十八年一月大勳位菊花章頸飾を賜り、功二級に叙し、金鷄勳章を授けらる。やがてその廿四日薨す。年六十一。廿九日國葬を以て東京豊島岡に葬る。

○征討總督 臨時の官なり。

○山縣有朋 本卷十の「黄海の戰その一」の條に畧傳あり。なほ、本書卷七、六の「砲のひびき」の條下、參照。

○參軍 參謀官なり。これも臨時の官。

○野津鎮雄 薩州藩士。入と爲り、驍勇沈毅にして果斷あり。擊劍を善くす。維新の際大に軍功あり。明治七年三月佐賀の亂起るや、始めて徵兵を率ゐて、これを平ぐ。十年西南の役起るや、奮進電撃、大に賊を破る。勳三等に叙せられ、陸軍中將に任ぜらる。十三年七月廿三日薨す。年四十四。

○山田顯義 本卷廿四、「ポアンナード氏を送る詞」の條に略傳あり。

○曾我祐準 舊久留米藩士。維新の後陸軍中將子爵に至る。今貴族院議員たり。

○三浦梧樓 長州藩士。維新の後陸軍中將子爵に至る。現に貴族院議員たり。

○大山巖 舊鹿兒島藩士。天保十三年十月十日生る。明治政府に事へ、現に、元帥陸軍大將正二位勳一等功二級侯爵たり。

○三好重臣 舊長州藩士。維新の後軍功あり。陸軍中將子爵に至る。先年薨せり。

○川路利良 舊鹿兒島藩士。維新の際軍功あり。明治政府に事へて、警察制度の爲に盡力す。西南の役陸軍少將に任ぜられ、西下して賊を討つ。十二年十月十三日病んで歿す。

○高島鞞之助 舊鹿兒島藩士。維新の後陸

軍大臣となる。現に樞密顧問官陸軍中將從二位勳一等子爵なり。○旅團 凡そ兵卒四十人を一小隊とし、四小队を一中隊とし、三中隊を一大隊とし、三大隊を一聯隊とし、二聯隊を一旅團とし、二旅團を一師團とす。○熊本鎮臺 今の第六師團なり。○司令長官 今の師團長なり。○谷干城 本卷廿七、「精神」の條に畧傳あり。○河尻 肥後國飽田郡にあり。○植木 同國合志郡にあり。○南關 同國玉名郡にあり。○高瀬川 玉名郡を流る、川なり。○田原坂 同國山本郡にあり。○吉次越 同國玉名郡にあり。○篠原國幹 鹿兒島藩士。常に西郷隆盛に信重せらる。維新の際軍功を以て、正五位近衛兵長官となる。明治六年十月征韓論起るに及び、議協はずして、故山に歸り、十年二月、隆盛と共に兵を擧げ、三月吉次越の戦に重傷を負ひて死す。

二九、功臣の末路 その二

○黒田清隆 本卷、二、「憲法發布」の條に略傳あり。○島津久光 是も同上の條下にあり。○柳原前光 舊公卿なり。明治十七年七月、伯爵を授けらる。廿七年九月病んで薨す。年四十四。○八代 肥後國八代郡にあり。○山鹿 同國山鹿郡にあり。○宇土 同國宇土郡にあり。○奥保鞏 豊前小倉藩士。弘化三年十一月十九日生る。明治政府に事へて、現に東部都督陸軍中將從三位勳二等功三級男爵たり。○山川浩 舊會津藩士なり。軍功を以て、陸軍少將となれり。後貴族院議員たりしが先年歿せり。○人吉 肥後國球麻郡にあり。○重岡 豊後國大野郡にあり。○出水 薩摩國出水郡にあり。○都城 日向國諸縣郡にあり。○佐土原 同國那珂郡にあり。○延岡 同國臼杵郡にあり。

り。○桐野利秋 鹿兒島藩士。維新の際戦功あり。明治政府に仕へて陸軍少將に進む。明治六年官を辭して國に歸り、十年西郷隆盛と兵を擧ぐ。事成らずして、九月廿四日城山に自刃す。○別府晋助 鹿兒島藩士。維新の後陸軍少佐となる。征韓論容れられずして國に歸り、西南の亂に與して、各地に奮戦し、遂に城山に自刃す。○村田新八 鹿兒島藩士。維新の後宮内大丞となる。岩倉公に従ひて歐洲に留學す。征韓論起ると聞き、俄かに歸朝して、職を辭し、郷に歸る。西南の役、賊に黨して城山に自刃す。○熊田 日向國臼杵郡にあり。○城山 鹿兒島にあり。

卷一 終

明治三十五年三月六日印刷
明治三十五年三月十日發行

非賣品

發行者

東京市神田區錦町一丁目十番地

三樹一平

印刷者

東京市神田區三河町二丁目十六番地

鈴木友三郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

株式會社 秀英舍

發行所

東京市神田區錦町一丁目

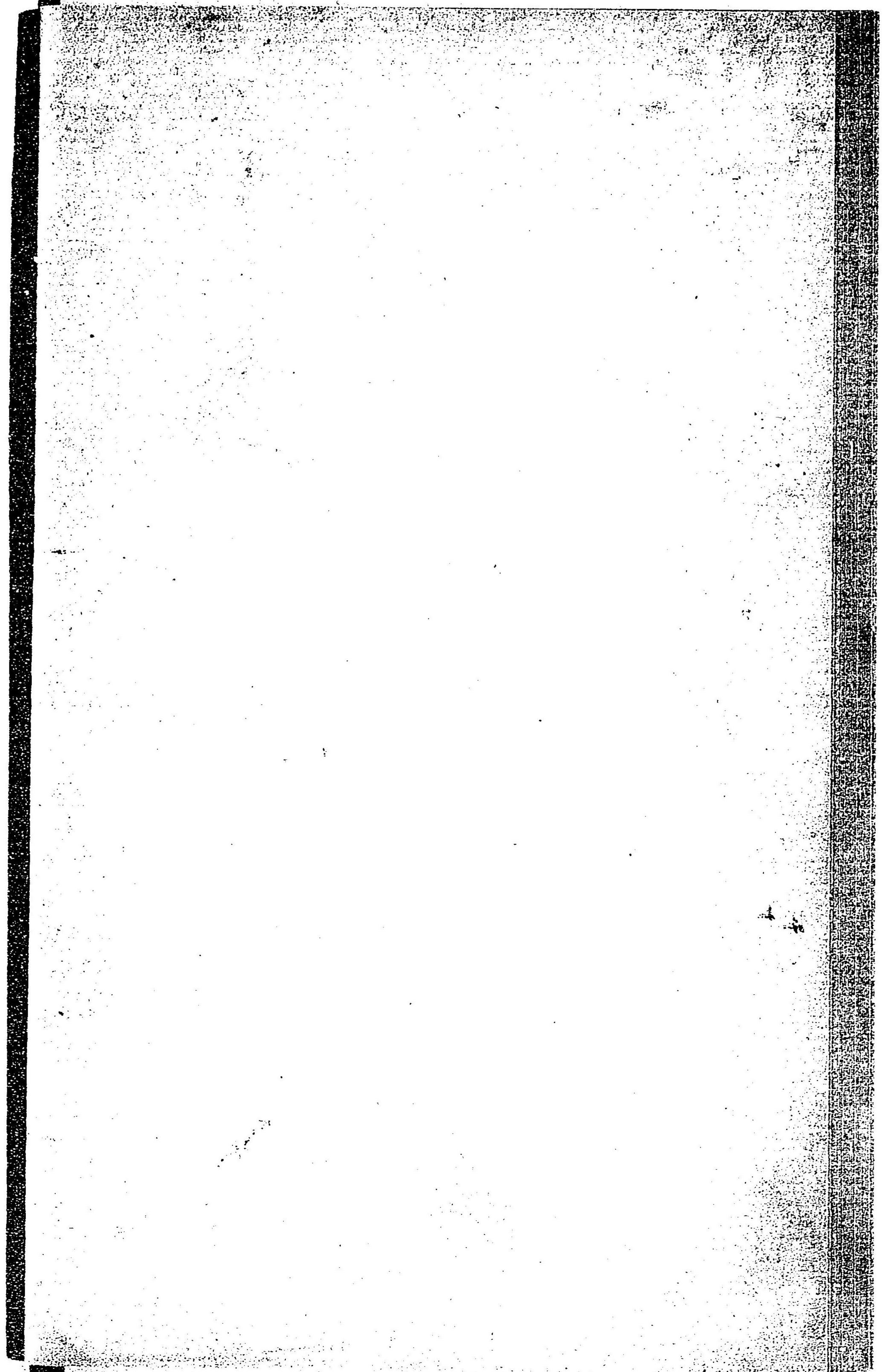
明治書院

同

大坂市東區備後町四丁目

吉岡平助

2215
38



中等國語讀本
參考書
全

品 類 別

明治書院編輯部編
明治書院發行

049394-001-9

特51-766

中等國語讀本參考書 卷1-5, 7-10

明治書院

M35

BEL-0543

